

●市民公開講座「人間と芸術」（平成 27 年 3 月 20 日開催）の報告

(大阪大学大学院医学系研究科) 佐藤 宏道
(奈良県立医科大学) 西 真弓

平成 27 年 3 月 20 日に神戸国際会議場大ホールにおいて、日本生理学会と日本解剖学会の主催による市民公開講座「人間と芸術」が開催されました。これは翌日からの両学会合同大会（第 120 回日本解剖学会総会・第 92 回日本生理学会大会、3 月 21-23 日、神戸国際会議場）のアウトリーチ企画として、基礎医学の柱である解剖学と生理学が

人間を含む動物を総合的に理解しようとしていることを一般市民に分かりやすく伝えるために行われたものです。誰もが関心をもっている「人間と芸術」というテーマで、生理学会推薦の岡ノ谷一夫（おかのやかずお）氏（東京大学：認知生物学）、解剖学会推薦の布施英利（ふせひでと）氏（東京藝術大学：美術解剖学）、そして美術教育学

パネリスト

岡ノ谷 一夫 東京大学
認知生物学、京大のワークル大学大学院で博士号取得、千葉大学文学部、理化学研究所認知神経科学センターを経て、2010年21東京大学総合文化研究科教授。
音楽、口話、口話、口話の認知科学と動物のコミュニケーション行動と動物・植物との関係とその仕組みを、動物学・心理学・認知科学、また動物の行動学（東京大学）との共同研究で、動物に伝わる口話のメカニズムを明らかにして発表する。動物の口話と人間の口話との関係にも興味がある。動物の口話の認知神経科学、この分野では「動物の認知と進化」と題して、小島のおとよりやその協力を得て動物の口話がどう進化してきたかを明らかに、その進化を人間の口話の進化と比較する。

福のり子 京都造形芸術大学
美術教育学、京大のワークル大学大学院で美術教育学を修めた。ニューメディア芸術研究センターで研究、英国および日本で様々な芸術・写真制作を手がける。2004年より京大の京大教授。
本講義のテーマは「アートは、作品とそれを作る人の間に起こる不連続な現象、意識では見えないコミュニケーションです」。この考えを軸に、討論会などの実践プログラム、LSDP (Art Communication Project) を実践、作品を通して進歩的なコミュニケーションすること、自己理解のめざす。人が人間として存在する以上、芸術は存在する。芸術は、他人の存在、思いや多様性を認めたいこととつながる。

布施 英利 東京藝術大学
美術解剖学、京大のワークル大学大学院で美術解剖学、同大学院修了後、京大医学部解剖学教室（藤原宏司教授）で人体解剖学研究に従事。2003年より東京藝術大学助教、2007年より教授。
2008年に「体のための美術解剖学」を著し、そこでは「身体は、顔の構造が非常に特殊なものである。目から心臓への血管系は、その構造、元の先にあるほどに複雑に折り込まれている。そんな複雑な構造を折り込まれた、という、本講義のテーマは、美術解剖学のメカニズム、アート・コミュニケーションのメカニズム、レオナルド・ダ・ヴィンチや、ルネサンス時代の科学と芸術の関係性を軸に、解剖学の歴史、あるものは解剖学の歴史とあるものを比較することなど、解剖学を総論的に紹介し、その進化を人間の進化にもつながる。

主催
日本解剖学会・日本生理学会
市民公開講座
<http://psj92-jaa120.uminn.jp/>

日時 2015年 3月20日 金
午後6:00～午後8:00
(開場 午後5:30)

会場 神戸国際会議場
メインホール
(ポータライナー 市民広場駅下車)

企画 佐藤 宏道 大阪大学大学院医学系研究科
西 真弓 奈良県立医科大学

お問い合わせ
大阪大学大学院 医学系研究科 生理学講座 脳生理学教室
〒555-0871 大阪府吹田市山田丘1-3
E-mail: art@lbs.osaka-u.ac.jp

公開講座ポスター。人体の調和を表すレオナルド・ダ・ヴィンチ「ウィトルウィウスの人体図」をモチーフにしたもの。

を専門とする福のり子（ふくのりこ）氏（京都造形芸大）を迎えての講演とパネルディスカッションでした。一般市民中心の参加者に対して興味深い話題（美術、音楽、コミュニケーション、脳、身体など）の数々が紹介され、フロアとパネリストのインタラクティブな討論が行われました。この市民公開講座当日について報告します。

プログラム

- 18：00 開会の辞（佐藤宏道：大阪大学）
 18：10 講演 1）
 岡ノ谷一夫（東京大学）
 芸術の起源と進化
 18：40 講演 2）
 福のり子（京都造形芸術大学）
 アートとは、作品とそれをみる人の間に起こる不思議な現象、深淵で素晴らしいコミュニケーションです！
 19：10 講演 3）
 布施英利（東京藝術大学）
 美術と解剖学—レオナルド・ダ・ヴィンチから現代へ
 19：40 総合討論
 20：10 閉会の辞（西 真弓：奈良県立医科大学）

岡ノ谷一夫氏は、鳥の歌の行動的意義やミラーニューロンシステムとの関連についての具体例とそれに伴う生理機能の関係を進化的プロセスとの関連で解説しました。さらに芸術美を鑑賞しているときに内側前頭眼窩皮質に活動が観察されるといふ報告に関連して、芸術の起源と社会的特性を「ハンディキャップ形質(生存に関係しない装飾や行動は個体の付加価値的な適応度の指標)」、「評価コスト（他者による評価が伴っているものは評価されやすい。逆に、これから評価を必要とするものは、ネガティブな評価を受けやすい）」という観



質問に答える岡ノ谷一夫氏

点から解説しました。

福のり子氏は、芸術鑑賞における創造的解釈、すなわちアクティブな想像力をフル動員する鑑賞の意義について解説しました。福氏は長年に亘り、米国でキュレータとして美術解説、美術展の企画や美術鑑賞教育に従事してきました。その経験を踏まえて、京都造形芸大では、芸術作品を鑑賞しながらのグループコミュニケーションによって、その作品を解釈し、理解する過程を重視する美術鑑賞を実践しています。福氏はそのためのナビゲーター役を果たす人材を育成しています。受け身の美術鑑賞ではなく、想像力を働かせ、他の人たちとの気づきのキャッチボールを通じて、作品に表現されているものを受容しながらイメージを構成していく積極的な鑑賞の意義について解説しました。

布施英利氏は、「日本における美術解剖学の起源」と「レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画と解剖学」という2部構成で話題提供しました。前半は、東京美術学校（現東京藝大）校長の岡倉天心が、芸大の美術学生に対する解剖学、生理学等の医学講義を森鷗外に要請し、鷗外がそれを行ったという史実などについてわかりやすく解説しました。人体を知らずして人間を描けません。後半はダ・ヴィンチが残した作品（「モナリザ」、「聖アンナと聖母子」、「洗礼者聖ヨハネ」と、ダ・ヴィンチ自身が行った30体ほどの解剖に基づく手の構造と機能についての読み解きで、素晴らしい解剖実習を見せられているような臨場感でした。解剖学的まなざしが「手のドラマ」へ、「最後の晩餐」でイ



アウストラロピテクスが所有したとみられる「顔の石」を解説する福のり子氏



パネルディスカッションで解説する布施英利氏

エスや弟子たちの、深い意味をもつ手と視線の描写、すなわち心の描写になりました。

3人のパネリストによる講演は会場を熱気に包み、活発な総合討論が行われました。「抽象と具象」、「オウムのもつまねにコミュニケーションの意義があるか」、「色彩による遠近法」、「ミラーニューロン」など、芸術の起源がどこにあり、人間と動物とはどこにおいて共通し、異なるか、議論が続きました。

会場アンケートの結果によると、参加者は130

名を越えました。

公開講座は有意義で充実していた	79%
人間と芸術について関心が深まった	78%
企画に親しみを感じた	82%
このような企画を今後も希望する	96%

と、大変好評でした。この市民公開講座は金曜日の午後6時から8時に開催され、夕食時の、一般の方々には参加しにくい時間帯であったかもしれませんが、それにも関わらず多くの方々にご参加いただき、議論していただけたことは、関心の高さを伺わせました。身体の構造と機能について科学の歴史を築いてきた解剖学と生理学が、どのような人間の姿を描いているのか、市民の皆さんにも身近にご理解いただけたのではないかと思います。

この市民公開講座は平成25年(2013年)の暮れに、岡村康司教授(大阪大学、合同大会大会長)により提案され、佐藤宏道と西真弓が企画と市民公開講座当日の司会を務めました。広く京阪神地区に対する広報や渉外、予算措置、会場運営など開催に必要な事務作業については北澤茂教授(大阪大学、合同大会副大会長)に全面的にご尽力いただきました。岡村教授と河田光博教授(京都府立医科大学、合同大会会頭)を初めとする大会組織委員会の先生方には、ご協力とご指導を賜りました。また京都府立医大写真部の皆さんには会場写真撮影をしていただきました。誌面をお借りして心より御礼申し上げます。この報告が遅れましたこと、お詫びいたします。